川崎市青少年芸術活動・市民劇

村形城落日の舞い

作・小川信夫

（作品ガイド）

枡形城・落日の舞い

もくじ

覚え書き……1
登場人物……3
場割り……5
梗概　第一幕……7
　　第二幕……11
この劇の背景となる時代のできごと（抜粋）……19

《覚え書き》

◆ この物語は今も登戸近くの生田緑地内に残る「枡形山公園」に因んだ物語である。この丘陵に砦の城を築いたのが稲毛三郎重成という武将である。時は鎌倉時代。もともと平家側にいた武将だったが、途中で従兄弟同士になる秩父の畠山重忠とともに頼朝側につき、その後、源平合戦や奥羽平泉の藤原氏との戦いに幾多の功績を挙げ、稲毛庄を頼朝より拝受。また妻は北條時政の娘、つまり政子の妹を頼朝公より授けられたと言われている。（畠山の妻も同じ政子の妹）稲毛庄は現在の高津区から中原区、多摩区にかけてあった荘園で、初代の稲毛三郎重成は、父は町田市にあった小山田庄の庄官、小山田有重である。

◆ 稲毛三郎重成は大変な愛妻家だったと言われ、ドラマはそうした要素も加味、特に従兄弟同士で幼少より朋友という関係だったにも関わらず、重成が北條の甘言に乗り「畠山に謀反の謀あり」となぜ上告したのか。そのために畠山は鎌倉に呼び出される途中、二俣川で北條義時の軍勢によって討ち取られている。享年四十二歳だった。

重成自身も、その数日後、罪なき畠山を讒言したとの罪で、追討の下知をくだされ、枡形城と小沢城から出陣、親子それぞれ散っている。まさに滅びいく鎮魂の美学、これをドラマの内包軸にした。

なお、ドラマはそこへの過程に力点を置き、重成と妻綾子、そして畠山との人間模様、また三浦義村を通じての怨念などをからませ、愛と嫉妬、誠実と不信など、男女の心理葛藤を扱っている。

◆ このドラマのもう一つの対立軸は、頼朝を一時はもり立てながら、やがて権力を樹立していった北條時政の人間像を描きたいと考えている。権力のためには源氏の血のすべてを絶やす。またわが子への愛も断ち切る非情さ、その不条理の裏にある「権力への渇望」これらを、関東武士の利害などもからませて構成した。

◆ また、場面場面の狂言回しとも言える人物として、もともと荘園で働いていた百姓出の郎従の若者二人を登場させ、雑兵ながら一方は侍へのあこがれ、一方は臆病で戦場では逃げ惑って生きてきた、その二人を通じて在家郎党・郎従（普段は農耕に従事していて、いざ鎌倉になるとお館様の荘園首領に駆り出され戦場にいく）の生きざまも描いてみた。

◆ 目に見えない権力機構や金に翻弄されながら生きる現代人、しかし、古今東西、歴史の荒波の中でも、変わらぬ生命の源、愛への憧憬を、このドラマを通して感じ取って頂けたらと、そんな願いを込めて構成した。

◆ 構成は能の舞台を下敷きにしたプロローグの場面やエピローグなどで謡曲の様式など工夫したい。

◆ 江戸時代から鎌倉時代、南部から北部、市民劇の広がりの中で、郷土の歴史に新たな視点を注ぎあいながら、川崎の土を水を山を、そして過ぎ去った歴史への慈しみのまなざしをともに共有したい、そんな願いで地域発信の演劇メッセージとした。

◆ 最後にこの稿の完成に当たって、多くの郷土資料の提示や聞き込みに便宜を図って戴いた方々に、心から謝辞を述べさせて頂きます。

（了）

《登場人物》

稲毛三郎重成　（小沢入道）
その息子　小沢小太郎重政
重成の妻　綾子
その娘　嘉子（後に宇都宮頼綱・妻）
　さくら（後に綾小路師季・妻）
重成の父　小山田有重
重成の重臣　勝部八郎吉家
侍　生田宗盛
侍　千石平八郎
郎従下人　小平太
同じく　喜八
侍女頭　八重
北条からの侍女・桂
侍　女　楓
秩父の豪族　畠山重忠

重臣　秩父太郎末次

北条時政

その息子　北条義時

娘・頼朝の妻　政子

三浦の豪族　三浦義村

三浦の側室　香

影向寺の医僧　法念和尚

巡礼の僧

老　女　八重の夢幻

里の男たち　数名

里の女たち　数名

その他の武士・雑兵　数名。

舞い女　数名。

里の童子たち　数名

忍びの者　（声）

《場割り》

第一幕

エピローグ　室町時代・興福寺の境内

二場　建久六年　初夏　稲毛三郎重成の館。

三場　（中幕の前）

四場　治承五年（一一八一）夏　北条の館

五場　三浦義村の直訴の場面

六場　北条・女人の館

七場　（中幕前）重成の追憶

八場　建久七年。初夏　興福寺の境内と仏間

九場　建久九年一二月・相模川河口

第二幕

十場　元久元年（一二〇四年）夏、枡形城の奥の間。

十一場　翌年、春。鎌倉・北条の館。

十二場　数日後。枡形城の奥の間。

十三場　その日の夜。興福寺の仏間と境内。

十四場　元久二年、初夏。桝形城の奥の間。
十五場　翌朝。桝形城の奥の間
十六場　「挿入の場」　二俣川合戦の場
十六場　桝形城の奥の間。
十七場　（中幕前）　多摩川の土手の道
十八場　桝形城の中
プロローグ　野火のおくり場（巡礼僧の世界）

◆全体を構成舞台に。
屏風、衝立障子、格子、几帳、御簾などを、二重の上に配して場面を象徴。
転換のスピードと照明の変化、鳴り物、音楽、舞台の舞いなど工夫。
◆特に舞いは鎌倉時代・舞楽の舞いや散楽、また能に近い舞いなどを工夫する。
◆導入と結末の場面は能（夢幻能的）アレンジを期待。

《梗　概》

第一幕

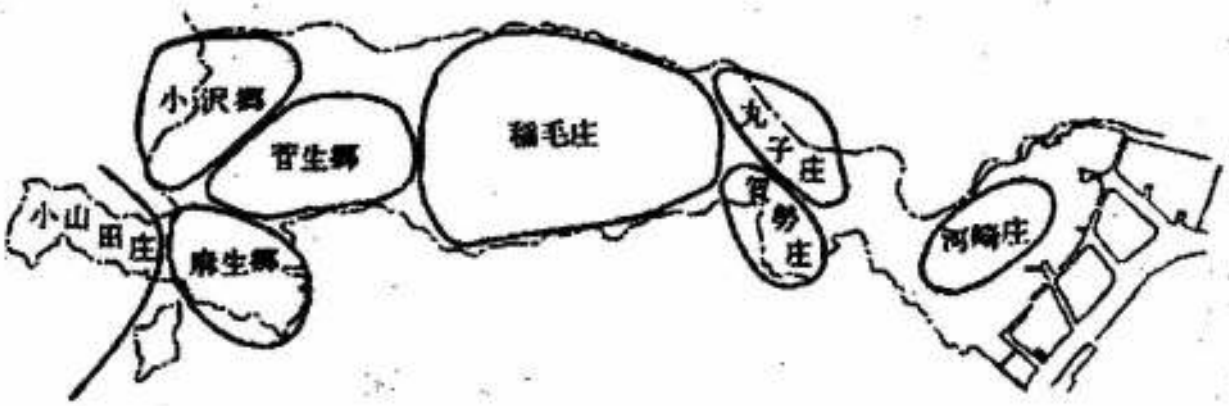
◆室町時代、諸国巡礼の琵琶法師が、向の丘近く森に囲まれた興福寺を訪れる。その僧は境内に眠る稲毛三郎重成と妻綾子を弔う五輪の塔の近くで不思議な老女に巡り合う。

老女はかってこの稲毛三郎と綾子に仕えた侍女頭・八重の化身だった。非業の死を遂げた主の霊を弔うため、長い歳月、夜ごと墓前に仕えているのだという。

老女の悲願にうたれた琵琶法師は、御仏に仕える身として、その成仏を祈願するゆえに、ぜひとも、老女の胸のうちにある「払いかねる深い悲しみの御事を詳しく物語ってくれ」と言う。

こうして、老女八重の語りの中に、物語の扉が開かれていく。

◆時は鎌倉時代、頼朝が鎌倉に幕府を開いてから間もなくの建久六年（一一九六）初夏、稲毛領にある重成の館は、重い雰囲気に包まれていた。重成の妻綾子が危篤に陥っていた。その時、重成は頼朝の第二の上洛の供として、従兄弟にあたる秩父の畠山重忠と共に京の都にいた。重成の父、小山田有重は、重成の子、小太郎重政と計り、京にいる重成に、この事態を知らせるために使者をたてることにする。



この館で働く郎党下人の小平太は「ぜひ、その使者に私を」と名乗り出る。この小平太は村人の喜八を誘い、武士を夢見て重成に仕え、奥州の合戦にも参加した男だった。しかし、身分の違いで一笑に付され、代わりの武士が高津の郷から呼ばれる。

◆知らせを受けた重成は頼朝から授けられた駿馬にまたがり、東海道を稲毛の郷へとひたすらに走り続ける。重成の脳裏には、綾子の舞う舞いの姿が彷彿として浮かぶ。それは幾多の旅立ち、幾多の合戦に出る度、綾子が精進込めて踊った祈願の舞いの姿だった。「あの舞いをもう一度、綾子、逝ってはならぬ。」懸命に心に叫ぶ重成だった。

◆一方、病床に伏す綾子の脳裏にも重成への思いが、走馬灯のごとくよみがえっていた。特に、嫁ぐ前の、あの鎌倉の館での出来事だった。

(追憶の場面)　「治承五年・一一八一」夏、北条時政の館。

◆頼朝の妻政子の妹綾子を稲毛三郎重成に、同じく妹時子を秩父の畠山重忠に嫁がせる。頼朝と、政子の父、北条時政との合意の中で決まったこの婚姻に、政子も弟の義時も強く異議を唱える。二人ともいまは御家人とは言え、去年までは平家側として戦った相手である。到底、妹は遣れぬと言う政子に、「あの両名の力をあなどってはならぬ」と時政は言う。

北からの脅威に対応する稲毛領と秩父領の戦略上の要所の問題、それと富士川の合戦に見せた両名の武者としての実績、それらを並べて将来のためにも身内につけておくことが賢明の策であると強く主張する時政に政子たちは折れる。

◆しかし、この二人の婚姻に強く反発する武将がいた。三浦義村である。去年、頼朝が石橋山で挙兵後、この稲毛、畠山連合軍に破れ、房総に逃れたとき、三浦の祖父義明が衣笠城で敗れ、畠山に討ち取られていた。この深い恨みを抱えた義村は、何としてもこの縁談を阻止したかった。だが「天下のためにいまは忍一筋に」と言う時政に、怨念の炎を胸に苦渋の中にひれ伏す義村だった。

◆そんな義村に側室香からの思わぬ「畠山と綾子を巡る艶聞」が届く。この春、鶴岡に八幡宮が建立されたとき、巫女たちの奉納の舞いに、綾子が心奪われ、それから密かに巫女、そして今では京から逃れてきた白拍子に舞いを指南させているという。身分の違う白拍子すら厭わぬまでに、舞いの世界に心奪われたのは、実は舞いの伴奏者畠山の妙なる笛の音に魅せられてのことという風聞だった。義村はこの風聞を聞き逃さなかった。香を通してこの風聞は誇張され、畠山に嫁ぐ時子の耳にも密かに伝えられていった。

◆動揺する時子は、父時政に、「自分を稲毛に、姉を畠山に嫁がせて欲しい」と願い出るが一喝の下に退けられる。「鎌倉殿が裁定した婚姻の命を覆すことはできぬ」

時子の思い余った話を聞いて綾子は驚く。「私が舞いに心奪われたのは誰のためではない、舞いが好きで、その舞いそのものに心がひかれたのだ」と綾子は懸命に言う。

「願わくばこの舞いを重成様が受け入れてくれたら……。」白拍子から送られた京からの舞いの扇を握りながら綾子は言う。そのとき、幼少よりこの北条の館に育ち奉公一筋に勤めている桂が、時政様の命により、私が綾子様の付き人として、これから稲毛の館で仕えるよう沙汰があったと言ってくる。そこには時政のある思いがあったが、綾子も時子もそのことを知るよしもなかった。

◆建久六年、夏の日の夕刻、蝉時雨の中、京から駆け戻った重成に抱かれて綾子は短い生涯を閉じる。重成の眼には、白絹の衣をまとった綾子の荘厳な舞いの姿がよみがえっていた。悲嘆に暮れる綾子の遺児、小沢城の城主・小太郎重政、そして泣き崩れる嘉子とさくらの二人の瞼にもその母の舞いの姿が焼き付いていた・・・・。

◆綾子の死は重成の心に深い悲しみを与えた。傷心の中に重成は近くの興福寺を改修し、ここに入って僧として綾子の霊を弔う決意をする。自らも法名道全、稲毛入道、小沢入道と唱え、一周忌の法要には、菅の里に薬師堂を建てて弔う準備も進めていた。

この重成を支えようと八重と桂も楓は、何れも寺に移っていた。近くの百姓や童子たちも重成を慰めようと、綾子が嫁入りのとき伊豆から持参したのらぼうが、いまはこの一帯の畑に実ったと、初物ののらぼうなどをもって来た。

そこへ思いがけず訪ねて来たのが畠山だった。

畠山は、僧になってまで綾子の霊を弔うその心には、頼朝公も自分も感心しているが、実はいま鎌倉がおかしいと伝える。

鎌倉に幕府を開いた頼朝だったが、根は都育ち、京の都やとりわけ朝廷との関係に心を配る頼朝に、危惧の念をいだく武将がいると畠山は言う。朝廷との接近で再び公家たちが勢力を持てば、折角手に入れた「本領安堵」や「新恩給与」の武将の特権が崩れるかも知れぬという不安だった。それらの不安をどうも後ろで束ねているのが北条殿らしい。こうした不安の中だからこそ、もう一度武士として頼朝公のお側近くで仕えないかと、畠山は重成を誘う。元は平氏で敵だった二人に、北条の娘を与え、御家人に仕立ててくれた頼朝公への恩義を強く胸に秘めている二人だった。

◆重成は綾子の三年忌に相模川の河口に、堅固な橋をかけ、その橋供養を境に再び鎌倉御家人として頼朝公に直々に仕える決心をする。

◆建久九年十二月、盛大な橋供養が頼朝公の参列のもと行われる。しかし、その帰途、突然、頼朝公の駿馬の暴走で、頼朝公は落馬、そのまま鎌倉に運ばれたが、明けて正治元年（一一九九）正月十三日、頼朝公は享年五十三歳の生涯を終える。

第二幕

◆頼朝公が逝ってから五年後、元久元年（一二〇四）夏、枡形城に密かに、重成と畠山そして小山田有

重たちが集まっていた。鎌倉を巡る異変続きの政情をどう乗り切るかの談合だった。将軍職は頼朝の長男頼家が継いだが、間もなく、時政の手によって失脚し、いまは修善寺に幽閉され、次男の実朝がわずか十二歳で将軍職についていた。北条を中心の謀略の中、源氏再建に尽くした武将が次々に姿を消していた。梶原景時をはじめ、頼家を支えた比企能員他一族、特に頼家の正室及び御子一幡をも謀殺する北条の手法に重成たちは眉を顰めた。

頼朝が臨終の前、重成と畠山に「御子を頼む」と言い残した言葉の重さを改めて誓い合う二人に、「無下に鎌倉に逆らうことだけが、最善の道ではない、苦労して得た領地、特にそこに働く民百姓の安泰も考えろよ」と重成の父有重は言う。既に有重は時政の天下を狙う野望とその力を見抜いていた。有重にとって戦いの無情さは身に染みていた。

かって村から徴兵され死んでいった若者を前にした家族の悲しみが胸に焼き付いていた。だが重成や畠山の心は一つに頼朝への奉公に燃え、将軍への忠誠心に燃えていた。

そこに届いたのが鎌倉にいる畠山の息子重保からの「頼家公、修善寺にて暗殺さる」の知らせだった。騒然とする中で、無言のうちに手を握り合う重成と畠山の姿があった。

◆その翌年の春、北条の館では、北条時宗が政子の前でいらだっていた。将来への策略として、関東の豪族足利と手を組むため、将軍実朝に足利義兼の娘を正室にと目論んだが、京に心を通わせる実朝に

拒否されたのである。「なぜ源氏の血は京になびく」とにかく、そのためにはしっかり、この北条が幕府を守らぬばならぬと時政は言う。そして、「このためには、これじゃ」と義時と政子に将軍からの下知状を渡す。

それは「所領安堵、一切の政務は今後、北条時政が執り行う」という執権への沙汰だった。驚く二人に時政は北条の紋章を示して言う。「伊豆の一豪族に過ぎなかったこの北条の、天下への夢がいま花開く」と。

この野望の実現のために、既に時政は政所別当の大江広元とも手を結んでいた。今までに邪魔な者は消したが、「ただ二つ、懸念がある。この将軍職の権限を奪う下知状に納得しない武士が恐らく二人いる」時政はここで重成と畠山の二人の名を明かすのだった。この者たちがすでに過日、桝形城に集まって談合を開いた事実も掴んでいた。

「天下が読めぬ、流れに疎い、ひたすら亡き頼朝への義と報恩一途の武蔵の国の無骨者、このまま見逃せば北条にとって、やがては災いになる」

時政は畠山に恨みをもつ三浦義村を使って、まず「畠山謀反の上申書」を作らせ、この筆頭署名人に稲毛を誘い込む策にでる。両人の仲を裂く老獪な策略だった。

◆もちろん、こんな策に重成が乗るはずはなかった。二人の信義の厚さを実感した時政は、さらに三浦の策によって、今は亡き娘綾子の舞いの扇を策略に使うことを決める。

この扇にまつわる話としては、かって綾子が嫁ぐ直前、この舞いを巡る畠山との風聞に心痛め、その

ために桂を付き人にたて、この桂からの知らせを受けて、綾子の動向を探った経過があった。しかし、それが風聞だったことを後で知って安堵したものの、綾子を疑った心の痛みは、綾子が早くして逝ったことで憐憫の情に変わっていた。そのため亡き綾子の供養にと、密かに桂に命じて手に入れて置いた、その扇だった。

政子や義時は綾子の操のためにも、その策は邪悪と言って反対するが、時政は天下覇権の夢を前にしては、私情は許してはならぬと言う。そして三浦の言う、頼朝公も天下の為に義経殿も切り捨てた。その言をくみ取り三浦の策略を採り上げる。

◆数日後、桝形城を訪ねた使者としての三浦の言を、重成は擦ね付ける。「畠山に限ってそのような謀反の儀など、ありようもない。」重成の畠山への信の厚さを前に、ついに三浦は最後の手段として「綾子の舞いの扇」を取り出し、これが畠山の手にあったと偽りを言う。この扇は綾子の亡くなった後、いくら探しても見つからなかった大切な形見の品であった。「だが、これが畠山に…。」動揺する重成に、三浦は改めて自分が綾子殿の父、時政殿の娘への思いを知って、畠山のもとから忍びを通して手に入れたことや、かって綾子が嫁ぐ以前の舞いへの動機は、畠山との邪まの関係があった風聞などを並べ立てる。「いまこそ、この邪まの恋への鉄槌を下すとき、誉れ高き武士としての道を歩め」と重成の心を揺さぶる。

◆「決断は明朝まで」の約束で、その夜は三浦を泊め、自らは興福寺の本堂にこもって祈りに入る重成

だった。空には稲妻が走る雷雨の夜。祈りを捧げる重成の前に鬼女が出て、畠山との邪恋の舞いを舞う。払いのける重成の胸に、清純な舞いに明け暮れた綾子の姿が映る。この両者の舞いの葛藤の中に、重成の心は大きく揺さぶられ、ついに落雷の響きの中に重成の嫉妬に狂う心が鬼女の舞いにさらわれてしまう。

◆突如、鎌倉からの呼び出しに不審を抱きながらも、畠山は少数の従者を従えて鎌倉に向かう途中、桝形城に立ち寄る。しかし、重成は留守と言って、この畠山に会わない。空しく、鎌倉に向かう畠山たちのひずめの音を聞きながら、重成の心もまた乱れる。琵琶法師の語る平家凋落の調べもむなしく響く。

◆その日の夕刻、桝形城に知らせが届く。畠山たちが、二俣川を挟む鶴ヶ峰で、北条義時、三浦義村連合軍に囲まれ、激しく攻め立てられている知らせだった。

この畠山を救うべく、直ちに出陣といきり立つ小太郎重政や重臣たちに、「動いてはならぬ」と重成はいう。なぜと不審の眼を向ける重臣たちだった。

◆一方、鶴ヶ峰では激戦が続いていた。しかし、多勢に無勢、追い詰められた中で、畠山は重臣秩父に書状を託し、是が非でもこれを重成の元に届けるように命じる。

◆その書状を開いた重成は驚く。畠山の今はの淵においても重成との信義を尊ぶその心意気と、そこに添えられた綾子の手紙だった。死期の近づく中で綾子が妹の時子にあてた別れの手紙は、重成への愛

と舞いへのかぎりない祈りが綴られ、最後にぜひとも重成と畠山の厚い信義を、扇の要として末長く保って欲しいと結ばれていた。

鎌倉に行く直前、鎌倉の倅重保からの知らせで、畠山と綾子殿との邪まのうわさが、再び三浦方から漏れていることに、心痛めた畠山が、時子と相談して、綾子の最後の手紙を持参したのだった。しかし、重成に会えずに、そのまま二俣川に来てしまったが、「これだけは綾子殿のためにも、死を賭してでも届けなければならぬもの」と最後に認めてあった。

◆ときはすでに遅かった。畠山が愛甲三郎の矢によって討ち死にしたしらせが届いた。己の非を嘆く重成、その心を問う小太郎重政、そこに突然、桂が走り込んでくる。

「私が、畠山様をこのような目に・・・・。」桂は涙にくれながら、自分が捨て子で時政に拾われ、慈しんで育ててもらい、その恩義には逆らう事ができなかったことや、時政のその時々の指示で動いていたこと、扇もその命により、時政様の子を思う慈悲の心に動かされ、密かに鎌倉に届けたことなどを告白する。

驚く一同のもとに、衝撃的な知らせが届く。一万の軍勢が「畠山を謀反と冤罪にかけた稲毛三郎重成、及び一族を討つべし」と稲毛の郷に向かっているという。

一同はここで初めて北条の陰謀を思い知らされる。が、とき既に遅かっ

（鶴ヶ峰の畠山重忠碑）

た。重臣によって斬首されようとする桂に、重成と重政は「直ちに鎌倉へ逃れよ」と命ずる。しかし、咄嗟に桂は重政の小刀を手にすると、「綾子様のお側に仕えます」と言って自害する。

◆堅固な桝形と小沢城で鎌倉勢を迎え撃とうとする重臣たちの策を許さず、城を出て多摩の丘陵で迎え撃つと重成は言う。稲毛の郷の民百姓を戦場に巻き込むことを嫌っての裁断だった。父小山田氏の言う仁の心を最後まで貫き通したかった。

◆多摩川の岸辺を大勢の百姓が逃れていく。父や息子を出陣させて送り出した後の老人、女、子どもたちの群れだった。男たちが戦場で果てても、彼らはどんなことがあっても、天と地の神を信じ、モミと鍬さえあれば、生き残れると誓い合う。

◆一方、出陣を前に従卒下人の喜八は嘆く、「死にたくねえ、生き残って百姓になりてえ」。この喜八を小平太はなじる。小平太は「あこがれの武士となって戦い、死ぬことは本望だ」と言う。脅える喜八と楓を臆病者と激しくののしるが、最後は二人に逃げろと城からの抜け道を教える。一緒に逃げようと言う喜八に、「俺は夢に命を賭ける」と言って出て行く。

◆最後の水盃を取り交わした重成親子は、八重に必ず生き残り、二人の娘の嫁いだ先、下野国の宇都宮頼綱と京の都にいる綾小路師季にそれぞれ達者で暮らせと遺言を残し、「これから心置きなく綾子の舞いが見られる」と安らかな心を八重に伝えながら出陣していく。どのような権力の非情さにもめげぬもの、それは夫婦の愛、そしてそれを支える家族の絆、それを最後に悟った重成父子の、毅然として死地に赴くその姿を、八重はその瞼に焼き付けるようにいつまでも見送っていた。

◆迫りくる夕闇の中、出陣後の静かな桝形の城に、妙なる調べの中に綾子の舞いの姿が浮く。しかし、それは鋭い柝(キ)の音で消え、舞台は一瞬朱に染まる。

◆どこともなく響く琵琶の音に乗り、八重が再び老女として現れ、一族の儚くも消え去った後、綾小路の二歳の姫に、その後、北条政子の計らいによって小沢の郷が与えられたことが告げられる。闇に消える老女に代わって、懸命に祈りを捧げる琵琶法師の姿だけが浮き上がっていく。続いて、字幕が浮く。

◆元久二年（一二〇五）六月二十三日、稲毛一族、北相に散る。

重成、綾子夫妻の霊は、興福寺境内・五輪の塔に眠る。

（完）

この劇の背景となる時代の出来事（抜粋）

治承四年（一一八〇年）頼朝の挙兵・娘の政子が頼朝の妻となった縁から、伊豆国へ配流された頼朝の監視役の北条時政は一族を率いて同陣し、石橋山の戦いで敗走。

八月　当初稲毛重成は小山田重成と名乗る。源頼朝挙兵では平家方として頼朝討伐に向かう。

一七日　頼朝の挙兵に留守番役の一七歳の畠山重忠は一族を率いて平家方として頼朝討伐に向かう。鎌倉の由比ヶ浜で頼朝と合流できずに引き返してきた三浦勢と遭遇、合戦となる。

二六日、畠山重忠は三浦氏の本拠の衣笠城を攻め、三浦一族は城を捨てて逃亡。重忠は一人城に残った老齢の当主で、母方の祖父である三浦義明を討ち取る。

（衣笠城合戦）。

一〇月　隅田川の長井の渡しにおいて、稲毛重成、畠山重忠らは秩父一族と共に頼朝に帰伏し御家人となる。

畠山重忠は先陣を命じられて相模国へ進軍、頼朝の大軍は抵抗を受けることなく鎌倉に入る。

養和元年（一一八一年）七月　重忠は鶴岡八幡宮社殿改築の上棟式で工匠に馬を賜る際に源義経ととも

に馬を曳いている。この頃に重忠は頼朝の舅の北条時政の娘（綾子の妹）を妻に迎えている。

寿永二年（一一八二年）一一月、頼朝の愛妾亀の前をめぐる政子の報復行動に時政の舅の牧宗親が関わっており、怒った頼朝が宗親に恥辱を与えた。時政は頼朝への抗議として一族と共に伊豆国へ引き上げる

寿永三年（一一八四年）、京を支配していた源義仲と頼朝が対立して戦った時、畠山重忠は宇治川の先陣争い、巴御前との一騎打ちなど勇名をはせた。

稲毛重成、木曾義仲追討に参加、続く一ノ谷の戦いでは源範頼の軍に加わる。

この戦いでは畠山重忠は馬を背負って崖を下るなどの武勇譚が残る。

文治元年（一一八五年）**守護地頭の設置**

北条時政、頼朝の命を受け、一千騎を率いて上洛し、守護と地頭の設置を認めさせるべく、朝廷との交渉に当たる（文治の勅許）。

文治二年（一一八六年）義経の愛妾の静御前が頼朝の命で鶴岡八幡宮で白拍子の舞を披露したとき、畠山重忠は舞いの伴奏を務めた。

文治五年（一一八九年）七月　**奥州合戦**　重成、奥州合戦に参加。

建久元年（一一九〇年）　畠山重忠、稲毛重成、頼朝の上洛に共に供奉。

建久三年（一一九二年）三月　**源頼朝、征夷大将軍就任。**

後白河法皇が崩御し、同年七月一二日、頼朝は征夷大将軍へと任ぜられた。一般的には将軍就任によって鎌倉幕府が開かれたとされる。

建久六年（一一九五年）　六月、稲毛重成、畠山重忠、頼朝の再上洛に随行する。その帰路美濃国で妻綾子の危篤を知る。頼朝から駿馬が下賜され急ぎ本領へもどる。

七月、妻の病没を悲しみ出家して法名を道全と名乗った。以降、稲毛入道、小沢入道と呼ばれる。

建久九年（一一九八年）　稲毛重成は亡き妻のために相模川に橋をかけ、その橋の落成供養に出席した頼朝が帰りの道中で落馬し、それが死因となる。

建久一〇年（一一九九年）　頼朝の死去、頼家が家督を継ぐ

正月、頼朝の死去に際し、畠山重忠は子孫を守護するように遺言を受けたと伝えられる。

正治元年　一〇月、結城朝光の発言を梶原景時が頼家を誹謗したと讒言。これを知った三浦義村、和田義盛らが怒り、諸将六六名による景時弾劾の連判状が作られ、畠山重忠もこれに名を連ねている。これで梶原景時は鎌倉を追放される。

正治二年（一二〇〇年）　十三人の合議制　二代将軍となった源頼家の専制がひどく、それを抑えるためということで訴訟権限が幕府の有力御家人十三人の合議制に渡された。

十三人の人選は、一説には北条時政の策によると言われている。

この年には、すでに梶原景時が追放されているなど北条氏による他氏族排斥の過程で、合議制は崩壊した。一二二五年、評定衆がその機能を継ぐ。

梶原景時、追討を受けて滅びる（梶原景時の変）。

北条時政、源氏一門にしか赦されなかった国司である遠江守に任官し、御家人として初の国司となる。

建仁元年（一二〇一年）　建仁の乱

正月から五月にかけて、梶原景時与党であった城氏一族が建仁の乱を起こして鎮圧される。

建仁三年（一二〇三年）比企能員の変

比企氏当主の比企能員は頼家の愛妾で嫡男一幡を生んだ若狭局の父で、権勢を振るい幕府の実力者北条氏の脅威となっていた。頼家が病に伏し危篤状態にあった九月二日、北条時政は能員を自邸に呼び出して謀殺。比企氏一族は一幡と若狭局を擁して小御所に立て籠もる。北条氏は尼御台北条政子の名で御家人に比企氏討伐を命じ、侍所別当の和田義盛もこれに参加して比企氏は攻め滅ぼされた。

比企能員の変では畠山重忠は北条氏に味方して比企氏一族を滅ぼしている。

九月、北条時政、時政の娘が乳母を務めた頼家の弟で一二歳の実朝を擁立し、自邸に迎える。

元久元年（一二〇四年）　頼家、北条氏により暗殺される。北条時政、頼家の将軍位を廃して伊豆国修善寺へ追放したのち暗殺した。

一一月　畠山重忠の息子の重保が北条時政の後妻・牧の方の娘婿である平賀朝雅と酒席で争った。この場は収まったが、牧の方はこれを恨みに思い、時政に重忠を討つよう求めたという。

元久二年（一二〇五年）六月二二日　畠山重忠の乱　、北条時政の策謀により畠山重忠に謀反の疑いがかけられ、時政の嫡男の義時を総大将とする討伐の軍が発せられ、幕府の大軍を前に重忠とその一族は滅ぼされた

二三日　北条時政の謀略によって従兄弟の畠山重忠が滅ぼされると、その原因は稲毛重成の謀略によるもので、重成が舅の時政の意を受けて無実の重忠を讒言したとされ、三浦義村によって弟の榛谷重朝、その子太郎重季・次郎秀重が謀殺され、重成は大江戸行元によって殺害された。子の小沢重政は宇佐見祐村に討たれた。

牧氏事件

北条時政は実朝の廃位を画策するが政子と義時が同意せずに失敗し、逆に失脚した（牧氏事件）。

建暦三年（一二一三年）五月　和田合戦

鎌倉幕府創業の功臣であり侍所別当の和田義盛は二代執権北条義時に度重なる挑発を受けて、横山党や同族の三浦義村と結んで北条氏を打倒するための挙兵をした。だが、土壇場で三浦義村は北条方に与し、兵力不足のまま和田一族は将軍御所を襲撃し、鎌倉で市街戦を展開する。

合戦は二日間にわたり続くが将軍実朝を擁し、兵力に勝る幕府軍が圧倒し、和田一族は力尽き、義盛は敗死した。この合戦の勝利により、北条氏の執権体制はより強固なものとなる

建保七年（一二一九年）一月二七日　実朝、公暁に暗殺される

雪が二尺ほど積もる八幡宮拝賀の日、夜になり神拝を終え退出の最中、公暁に襲われ落命した。享年二八（満二六歳没）。

小川　信夫

【 略歴 】

元・川崎市総合教育センター所長、玉川大学学術研究所客員教授。青少年演劇作家。日本青少年・児童演劇協会常任理事。日本人間関係学会、日本国語教育学会に所属。

全人教育の立場から演劇作家として、「多摩川に虹をかけた男・田中兵庫物語」を川崎市民劇として発表、井上やすし、別役実審査員による「斉田喬戯曲賞」受賞。続いて「池上幸豊とその妻」上演。

平成2年度川崎市文化賞受賞。三越劇場等での舞台劇作品も多い。その他、NHK等での青少年向けTV脚本など多く手がける。出版では「親に見えない子どもの世界」「少子社会の子どもたちは今」その他の著書がある。

「劇作講座」

「枡形城・落日の舞い」　メモ

一、　市民劇（郷土劇）の条件

○　市民に共通的な話題と共感を呼ぶ題材を選定する。

・歴史劇の魅力

・過去の二作の上演の成果を踏まえる。

「多摩川に虹をかけた男」　小川信夫・作　高木達・演出（青年座）

「池上幸豊とその妻」　小川信夫・作　香川良成・演出（元前進座）

二、　枡形公園跡の歴史

○　稲毛三郎重成と畠山重忠の一族の悲劇的終焉。

・元久二年（一二〇五年）六月。共に義父の北条時政によって滅ぼされる。

・稲毛と畠山は従兄弟同士。共に頼朝挙兵のときは平家側。後に頼朝に帰伏して源氏につき御家人となる。その後、源平合戦や奥州合戦等に数々の武勲を立て、頼朝の信頼を得た。

・稲毛も畠山も妻は頼朝の沙汰により、北条時政の娘を授けられている。

・稲毛の妻が危篤になったとき、頼朝に従い上洛のお供をしていた稲毛は、頼朝から寵愛の駿馬（三日馬）を授かり、三日間晩走り続け、臨終に立ち会ったという。その後、出家。一周忌に菅の薬師堂、三回忌に相模川河口に橋をかける。出家の寺は枡形城の近くの興福寺。

・後に稲毛が、執権を狙う北条時政の罠にはまり、畠山に謀反の企みありと実朝に上申したため、畠山は父子共々、義時や三浦義村らに鎌倉、また父は二俣川にて討たれる。

・その後、無実の畠山を虚言した罪で、稲毛一族も鎌倉によって攻められ、滅びる。

・後に北条政子の計らいで、稲毛の娘、綾小路師季の妻の幼女に、小沢郷が与えられたという。

三、　ドラマとしての構成はどのように。（着眼点）

（ア）稲毛三郎重成を中心とした枡形城物語とする。特に妻（綾子）との愛情をドラマの貫通行動線の核にして構成する。

①　妻の幽玄な舞の姿に魅了される。

②　妻の死後、一時は興福寺に籠り出家の身となる、菅の薬師堂と獅子舞、相模川の橋供養。この帰り源頼朝が落馬、このために死去する。

③　畠山を裏切るキーワードは、妻を巡る畠山との愛と嫉妬、信頼との卍の葛藤。言わば「オセロ」の心境。

(イ)滅びの美ともいえる色調をドラマに備えたい。

① プロローグとエピローグは、能の形式（夢幻）をとり、巡業の琵琶法師と従女頭の八重（亡霊の老女）との語りの中の展開として構成する。

四、資料の収集

○鎌倉時代の歴史的事実の把握に努める。

② 郷土史の読み砕き。

③ 郷土史家との話（ライブ・ヒストリー）

④ 吾妻鏡等の定本の読みこなし。

⑤ 鎌倉時代の歴史考察の本の読み。

⑥ 町田郷土資料館、川崎市民ミュージアム。

○参照 「この劇の背景となる時代の出来事」（抜粋）

五、構成にとって配慮すべきこと

1、物語の経過が二十五年に及ぶ長期のものである。単なる歴史の解説にしない。語り部としての人物の設定を考える。

2 その間の多義に渡る時間の流れ、事件の立証をテーマに沿って、どう簡潔にまとめるか。（回りくどさ、過ぎたる説明、資料の安易な投げ込みを避ける。）

3、制限された舞台の時間と空間を意識する。つまり戯曲の外部も意識して書く。そのため、全体を構成舞台にする。場面の変化は飾り物や置物等の工夫で表す。

4、歴史的事実や証明に走り、事実の答え（オチ）に陥ることなく、その解き方にドラマの着眼点を置く。

5、ト書きも文学、粗雑に書かない。

6、せりふは口語体として武士や農民の当時の言葉をわかりよく、現代語に引き付けて工夫する。

7、その他。

（メモ欄）

【田中兵庫】1662-1729・江戸中期の農政家
武蔵国多摩郡平沢村(現東京都あきる市)に生・窪島休愚亦は休愚右衛門・幼少から農業と絹織物の行商に従事。後に東海道川崎宿の本陣，田中兵庫の養子になる。・1705 年(宝永 2 年)名主及び問屋役。1705 年関東郡代伊奈氏に上告，六郷川渡船権を得て川崎宿の財政立て直しを図る。・1721 年(享保 6 年)**「民間省要(みんかんせいよう)3 巻 77 項目」**成る。これは，農政及び意見書。師と仰ぐ成島道築(なるしまどうちく)を介して大岡忠相(おおかただすけ)から将軍徳川吉宗に献上される。1723 年，川方御普請の御用を拝命・**◆武蔵国荒川・多摩川の治水◆二ケ領用水・大丸用水の改修工事◆相模国酒匂(さかわ)川の治水のための文命堤**を築く。・1729 年 30 扶持(ぶち)支配勘定格・大岡配下 3 万石を支配・1729 年 12 月 22 日江戸で没・68 歳。

【池上幸豊】1718 生・江戸中期の新田開発
1718 年(享保 3 年)武蔵国橘郡大師河原(現川崎市川崎区)に生・池上氏は藤原忠平(880-949)の末裔か。現大田区千束に住み池上宗仲は日蓮宗大本山池上本門寺を建立・曾祖父の池上幸広は池上本門寺を再建すると同時に多摩川河口に大師河原稲荷新田開拓のため一家をあげ移住・池上幸豊 12 歳の時父を亡くし跡を継ぐ。・1746 年(延享 3 年)幕府に新田 100 町歩の開拓を申請。しかし認めらず 1752 年(宝暦 2 年)15 町歩の認可。6 年の歳月と 767 両余りの費用をかけ宝暦 12 年 14 町 5 反余を開拓◆**「池上新田」**と命名◆この他**砂糖製法◆氷砂糖製法◆製塩◆梨や葡萄，無花果などの果樹栽培◆野菜栽培**などの産業開発に貢献した。・「義」を貫く。・和歌や測量術，土木，医学等に秀でた才覚。

【稲毛三郎重成】平安時代末期から鎌倉時代初期の武将・枡形城主(現川崎市多摩区枡形山・生田緑地)・当初，小山田重成・父小山田有重は畠山重能とともに平家一族。
1180 年(治承 4 年)源頼朝挙兵で隅田川長井の渡しで重成は畠山重忠や秩父一族らとともに頼朝に帰伏し御家人となる。
その後，**頼朝正室，政子の妹(北条時政の娘)**を妻に迎える。・多摩丘陵，広大な稲毛荘を安堵・枡形山に枡形城築城
1184 年(寿永 3 年)木曾義仲追討参戦・一ノ谷の戦いでは源範頼軍に加わる。・1189 年(文治 5 年)奥州合戦に参戦・1190 年(建久元年)頼朝上洛に供奉。
1195 年(建久 6 年)6 月，頼朝再上洛の帰路，美濃国で妻の危篤を知る。**7 月妻病疫**。悲しみ出家して道全と名乗る。稲毛入道若しくは小沢入道と呼ばれる。
1198 年(建久 9 年)重成は亡き妻の供養に相模川に橋を架ける。・落成供養に出た**頼朝は帰路落馬して，それが元で死去**とされている。
1205 年(元久 2 年)6 月 22 日畠山重忠の乱勃発・重成の謀略により北条時政をして従兄弟の重忠を謀殺・23 日弟の榛谷重朝と子太郎重季，次郎秀重を三浦吉村が謀殺・そして重成も大江戸行元によって殺害され，子の小沢重政も宇佐見祐村に討たれた。
11 月 3 日一族の小沢信重が 2 歳の姫を伴い京から鎌倉を訪れる。・姫は源師季(綾小路師季)と重成の娘の間の子，北条時政の外曾孫。・重成の災害から逃れていたが北条政子により綾小路の姫を猶子とした。重成の遺領武蔵国小沢郷を与える。